



Contents

- ❖多文化共生を育むスポーツの力
～FIFAワールドカップが示す可能性～
- ❖『大東文化大学百年史』完結と記念講演会開催のお知らせ
- ❖大東アーカイブス 第29回 企画展
「大東書道100年のあゆみ」
- ❖資料紹介 谷鼎と『日本文学研究』創刊号
- ❖コラム 附設校の大東文化大学第一高等学校の開校
- ❖大東アーカイブス活動記録

大東文化大学第一回全国書道展開催(1959年)

「書道の普及と書技の向上」を目的として、1959(昭和34)年に大東文化大学第1回全国書道展が開催されました(当時は「全国学生書道公募展」、同時に「全国学生書道展」「全国書道展」などの略称も使用され、第12回より「全国書道展」に統一)。以降、現在まで66回にわたり実施されてきた伝統ある書道展には、いまや海外からも多くの作品が寄せられています。なお、1959年9月20日には創立35周年記念式典も開催されました。これを機に新たに講堂・体育館・図書館の建設を進め、さらなる飛躍を目指し池袋から板橋への校地移転計画が本格化するなか、全国書道展の開催は大東書道の発展に一層力を入れていこうとする決意の表れでもありました。

Daito Archives Newsletter

大東文化歴史資料館
ニューズレター
エクス・オリエンテ

Vol.

40

Ex Oriente

多文化共生を育むスポーツの力

～ FIFA ワールドカップが示す可能性～

大東文化大学副学長

宮城 修 (スポーツ科学科教授)



大東文化大学は、2026年3月に大学スポーツ協会（UNIVAS）が主催する「UNIVAS AWARDS 2025-26」において、「大学スポーツプロモート優秀取組賞」の最優秀賞を受賞しました。この賞は、大学スポーツの普及・活性化や大会における集客・応援促進に向けた先進的な取り組みを表彰するものであり、本学が長年にわたり推進してきたスポーツ振興活動が高く評価されたものです。

本学はこれまでにスポーツが有する社会的価値を重視し、その発展に貢献するとともに、教育・研究活動の充実にも取り組んできました。1966年に体育連合会が創設されて以来、本学のスポーツ活動は着実な発展を遂げ、これまでに8種目の競技で23名のオリンピック出場者を輩出するとともに、9種目にわたる競技において学生日本一の栄冠を獲得するなど、全国屈指の競技実績を誇っています。このように本学がスポーツを重視してきた背景には、競技力向上とともに、スポーツが様々な人々を結び付ける社会的・文化的価値を有していると考えてきたからです。

スポーツに関する教育・研究活動については、2005年に本学で第8番目の学部となるスポーツ・健康科学部、続いて2009年にスポーツ・健康科学研究科が設置されました。これにより、学部から大学院まで一貫した教育・研究体制が整備され、スポーツ科学と健康科学に関する教育・研究活動が活発に展開されています。私自身もこのような教育・研究環境のもと、スポーツ生理学およびサッカーを専門分野として、競技力向上に資する研究に取り組んでいます。このような研究対象でもあるサッカーは、単なる競技スポーツにとどまらず、世界中の人々を結び付け、多様な文化や価値観をつなぐ社会的・文化的な役割を担っています。その象徴的な舞台が国際サッカー連盟（FIFA）ワールドカップです。本学では「東西文化の融合による新しい文化の創造」を建学の精神に掲げ、多様な文化的背景を持つ人々が互いを理解し尊重しながら共に生きる「多文化共生」を理念としています。そこで、2026年6月に開幕するFIFAワールドカップ北中米大会と、本学の理念である多文化共生との関連性について考えてみたいと思います。2026 FIFAワールドカップ（第23回大会）は史上初となるアメリカ、カナダ、メキシコの3か国による共同開催であり、多様な民族や文化が共存する北中米地域で開催されることから、多文化共生を体現する大会としても注目を集めています。続く2030FIFAワールドカップ（第24回大

会）は、大会創設100周年を記念する節目の大会としてモロッコ、スペイン、ポルトガルの共同開催が決定されており、FIFAワールドカップが国境を越えた国際協力の象徴としての役割を一層強めています。

さらに、2026 FIFAワールドカップからは出場国数が従来の32か国から48か国へと拡大され、これまで出場機会が限られていた国々にも世界最高峰の舞台へ道を開くものであり、サッカーの国際的な普及と発展を促進する重要な意義を持っています。

ワールドカップ期間中には世界中から選手、スタッフ、サポーター、メディア関係者が集まり、多様な文化や価値観が交差する国際交流の場が形成されます。異なる国の人たちが同じルールのもとで競い合い、互いを尊重しながら交流する姿は多文化共生の理念を体現する象徴的な光景であるといえます。試合後に選手同士が健闘を称え合う姿、そして異なる言語や宗教的背景を持つ選手たちが代表チームで協力する場面は、相互理解を深めていく可能性を示しています。また、近年では欧州諸国をはじめ、多くの代表チームが移民やその子孫を含む多様なルーツを持つ選手によって構成されています。各選手のアイデンティティを尊重しながら、共通の目標に向かって全力を尽くす姿勢には、多様な価値観を認め合いながら結束を築いていく現代社会の理想像を示し、多文化共生の意義や可能性を考えるうえで重要な示唆を与えています。

その一方で多文化共生の実現には課題も存在しており、人種差別や偏見、宗教的価値観の相違、そして社会的格差といった問題は、ワールドカップの舞台においても完全に解消されたわけではありません。しかし、FIFAでは人種差別の撤廃や平等の推進に向けた取り組みを継続しており、スポーツを通じて多様性を尊重する社会の実現を目指した活動を積極的に進めています。

以上のように、スポーツには人々の違いを認め合い、互いを尊重しながら共に生きる社会を育む力があります。なかでもFIFAワールドカップは、多様な文化や価値観を持つ人々が交流し、相互理解を深める可能性を世界規模で示す象徴的な舞台であるといえます。本学が掲げる「多文化共生」の理念もまた、このような相互理解と協働の精神に支えられています。ワールドカップがもたらす感動や交流の姿は、多文化共生の実現に向けて私たちが大切にすべき価値を改めて示してくれるのではないのでしょうか。

『大東文化大学百年史』 完結と記念講演会開催のお知らせ

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦（歴史資料館館長・経済学部教授）

百年史編纂委員会では、このたび『大東文化大学百年史』下巻を刊行し、これをもって全三巻から成る百年史編纂事業が完結する運びとなりました。2010年の編纂委員会発足以来、長年にわたり進めてきた本事業が一区切りを迎えられましたことを、関係各位のご支援・ご協力のおかげと、心より感謝申し上げます。

すでに刊行された上巻・中巻では、創立から戦後期までの歩みを中心に、本学の理念形成、教育研究活動、学生文化、戦時下と戦後改革、そして高度経済成長期以降の大学大衆化のなかで進展した学部拡充・キャンパス整備など、本学発展の過程を叙述してきました。そして今回刊行された下巻では、1980年代末から2023年までのおよそ30年間を対象に、昭和末期・平成期・令和初期という、本学にとっても社会全体にとっても大きな転換の時代を扱っています。

この時代、日本社会は、冷戦終結後の国際秩序の変化、長期経済停滞、少子化の進行、度重なる自然災害、さらには新型コロナウイルス感染症の世界的流行など、かつてない規模の変動を経験しました。大学もまた、その影響を直接受け、教育・研究・経営のあり方そのものを問い直される局面に立たされました。

下巻では、第8章「変化し続ける大学」において、1991年の大学設置基準大綱化以降の改革を軸に、自己点検・評価制度の導入、カリキュラム改革、コンプライアンス体制整備など、本学の教育研究基盤の再構築過程を詳述しています。また、学部・学科・研究科の新設・改組、板橋キャンパス整備事業、70周年・80周年記念事業など、制度的・物理的発展についても整理しました。

第9章「大東文化大学の現在と未来」では、2000年代以降の中長期計画策定、大学ガバナンス改革、90周年記念事業、東松山キャンパス整備事業、新型コロナウイルス感染症への対応などを、現代大学史の重要な記録として位置づけています。さらに最終節では、全三巻の編纂を通じて浮かび上がった本学の特質と課題を整理し、今後への展望についても簡潔に触れました。

とりわけ下巻は、現在の教職員・学生・卒業生の記憶とも重なる時代を扱っているため、個人情報や機微情報の取扱いには十分配慮しつつ、可能な限り客観的・中立的な記述となるよう

編集を進めてきました。同時に、大学史を単なる出来事の集積ではなく、「組織として何を選択し、どのように試行錯誤してきたのか」を示す記録として描くことを意識しています。

全三巻の完結にあたり、本学百年の歩みを広く共有する機会として、2026年7月31日（木）に記念講演会を開催いたします。講演タイトルは、「大学史編纂から見えてきたもの—大学と社会の100年—」を予定しており、百年史編纂作業を通じて浮かび上がった本学の特徴や転換点、社会との関わりについて、具体的なエピソードや資料を交えながらお話しする予定です。

また、『大東文化大学史研究紀要』最新号も3月末に刊行されました。最新号には、前号に引き続き、太田元学長および内藤元学長へのインタビュー記事が掲載されており、それぞれの時代における大学運営の理念や意思決定の背景が、当事者の言葉として記録されています。これらは、百年史本文とは異なる角度から本学近年史を読み解くことのできる貴重な一次資料と言えるでしょう。百年史下巻とあわせてお読みいただくことで、本学の歩みをより立体的に理解していただけるものと思います。

なお、大東文化大学史研究紀要編集委員会では、『大東文化大学史研究紀要』掲載論文等を随時募集しております。大学史研究、教育史研究、学内資料紹介などございましたら、ぜひ積極的にご投稿いただければ幸いです。ご投稿に関するお問い合わせにつきましても、下記歴史資料館事務室までご連絡ください。



大東文化歴史資料館事務室

電話／03-5399-7403 FAX／03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

大東アーカイブス第29回企画展 「大東書道100年のあゆみ」

【展示期間】

2026年4月10日(金)～7月24日(金)

【開室時間】

毎週月～金曜日 9:00～17:00

※日曜・祝祭日、入学試験期間中および大学の休校日に準じて閉室

【展示場所】

大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)



書道研究所の全面協力のもと、
以下の日程で本学に関わりのある教育者、
書家の作品や貴重な資料を展示いたしました。

【第1期】 4月10日(金)～5月11日(月)

大東書道100年のあゆみ「草創、台頭期・停滞期」

【展示作家】

渋沢栄一・平沼騏一郎・土屋竹雨・塩谷温・高塚竹堂

【第2期】 5月12日(火)～6月8日(月)

大東書道100年のあゆみ「再建期、隆盛期Ⅰ」

【展示作家】

上條信山・松井如流・宇野雪村・青山杉雨・熊谷恒子

【第3期】 6月9日(火)～7月6日(月)

大東書道100年のあゆみ「隆盛期Ⅱ」

【展示作家】

今関脩竹・永井暁舟・浅見寛洞・今井凌雪

【第4期】 7月7日(火)～7月24日(金)

大東書道100年のあゆみ「隆盛期Ⅲ」

【展示作家】

東山一郎・村上翠亭・古川悟・久米公



次回企画展開催のお知らせ

大東アーカイブス第30回企画展

『大東文化大学百年史』刊行記念特別展：

年史が紡ぐ大東文化百年のあゆみ

—歴史資料と記録から読み解く—

【展示期間】 2026年7月28日(火)～2027年3月31日(水)

【開室時間】 毎週月～金曜日 9:00～17:00

※日曜・祝祭日、入学試験期間中および大学の休校日に準じて閉室

【展示場所】 大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

大東文化大学は2023年9月20日に創立百周年を迎え、同日に『大東文化大学百年史』上巻を上梓いたしました。続く中巻を2025年3月31日に、下巻を2026年3月31日に刊行し、全3巻をもって完結に至りました。第30回企画展では、『大東文化大学百年史』の編纂過程および全3巻の内容を紹介するとともに、使用した関連資料や創立100周年記念事業を振り返り、この間に制作・使用された100周年記念グッズなどを公開いたします。

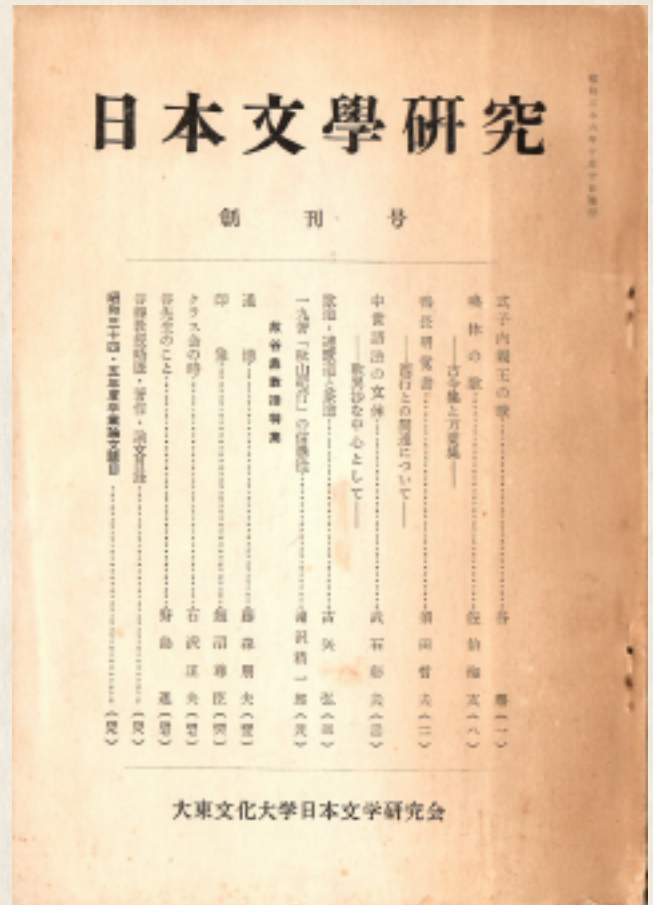
谷鼎と『日本文学研究』創刊号(昭和36年10月10日発行)

大東文化大学日本文学研究会が編集刊行した『日本文学研究』は、1961（昭和36）年10月に創刊発行された。大東文化大学が池袋校舎から現在の板橋校舎へと移転したのが同年8月であったため、創刊号「編集後記」には「すでに新校舎にうつり、画期的の飛躍をとげつつある本学のなかにあつて、日本文学研究会の今後の発展を心から祈ってやまない」と記されている。大東文化大学日本文学研究会（日本文学会）は、文学部日本文学科関係教職員・学部生・大学院生・卒業生によって組織され、日本文学・日本語学の学術研究活動の成果物として刊行されてきた『日本文学研究』は、現在までに通巻号数として第65号を数える伝統ある刊行物である。

さて、『日本文学研究』創刊号は「故谷鼎教授特集」と題された追悼号でもあった。谷鼎は大東文化大学日本文学科教授として在職中であった1960（昭和35）年7月15日に輪禍により急逝しており、同誌「編集後記」には、「創刊号については、谷鼎先生も御生前から期待しておられたものだけに、先生の御目にかけることのできないのは、誠に残念である」とある。また、「編集後記」にはさらに「日本文学会が結成され、研究誌発行のことが決定されたのは、昭和三十五年のことであった」とあるので、1年余の準備期間を経て刊行されたものであったことがわかる。

歌人であり国文学者であった谷鼎は、戦後に新制大学として再出発を果たした本学の発展を支えたとともに、大東文化大学校歌の作詞者でもあった。谷は1896（明治29）年9月に神奈川県に生まれ、東京高等師範学校国語漢文科を経て京都帝国大学文学部へ進学、卒業後は東京府立第五中学校の教諭となった。東京高等師範学校が東京文科大学へ移行すると同大学附設中等教員養成所でも講師をつとめ、1951（昭和26）年より文政大学（1953年より大東文化大学と改称）文政学部教授に就任した。

新制大学の認可を受けたものの当時の大東文化大学の学生数は極小の規模で、池袋にあった校地も大学としてはかなり狭小であった。「大学」として発展していくためには、学生数の増大はもちろん校地校舎の拡大を含む大規模な改革が必要であり、創立30周年を迎える1953（昭和28）年9月に先駆け、士気を高めるためにも「校歌」の制定が必要とされた。新制大学として盤石の歩みを進めるため、旧来の漢文で詠まれた「学院歌」にかわる新たな「校歌」を必要としていたのである。なかでもその歌詞の内容をどのようにするかは重要な意味を持っていた。そこで白羽の矢が立ったのが、歌人としても名高い谷教授であった。依頼を受けた谷は試行錯誤を重ね、新たな時代に即しつつ大東文化の歴史・理念・学生像をも見事に詠み込んだ歌詞を完成させた。1953（昭和28）年9月の創立30周年において



披露された校歌には、「心は放て天地間 まなこはさらせ世の移り 濁濁の浪高くとも 棹さす水脈はまぎれなし」と、いかに困難な状況にあっても自身の信じる道をまっすぐに進む至高の信念が歌われた。こうして現在まで歌い継がれる「大東文化大学校歌」が誕生したのであった。

『日本文学研究』創刊号の巻頭論文は谷鼎「式子内親王の歌」、そして「故谷鼎教授特集」には寄稿された追悼文が4本掲載されている。そこには「几帳面に教鞭をとって」「先生の落ち着いた講義」など、穏やかで誠実な人柄を伺わせる表現が多く見られる。また谷は在職中、大東文化大学内に「木曜短歌会」という私的「文学サロン」を設け、日本文学会発足にも尽力した。谷が在職中の大東文化大学は「文政学部」一学部のみであったものの、日本文学科の発展に大きく寄与したと言える。その後、文政学部が改組され文学部と経済学部とが発足するのは、谷の急逝から1年半余り経た1962（昭和37）年のことであった。

附設校の大東文化大学第一高等学校の開校

谷本 宗生 (歴史資料館運営委員・専任研究員)

2026年3月末をもって、『大東文化大学百年史』の刊行事業は計画どおり完遂されたことになる。これをうけて、本紙面のコーナーでは著者（谷本）が、大東文化大学史を探究するなかで、新たに気づいた発見やさらに課題と感じたことなどについて、率直な「コラム」として、みなさんに紹介していきたいと思う。

そこで今回は、附設校である大東文化大学第一高等学校の開校について取り上げたい。1960年（昭和35）年、法人名を学校法人大東文化学園と改称変更して、「振興建設計画」で示したとおり、新制大学のほかに、高等学校や各種学校などの附設校を設置し運営していく方向を明確に表明した。実際、1963年の創立40周年記念事業計画においても、教学および研究機能の充実強化をはかり、「一貫せる人材教育を徹底せしむる」ものとし、大学の学部学科を増設し、東洋研究所や書道施設の充実整備、そして附設校として、高等学校や大東柔道整復専門学校に衛生検査技師科をあわせた大東医学技術専門学校などを設置していくとした。

1961（昭和36）年8月、東京都知事より大東文化大学第一高等学校の設置認可がなされた。初代校長は大学長も務める平島敏夫とし、翌62（昭和37）年4月に開校するものとされた。普通科3年制の修業年限で、収容定員270名とした。学校名について、「第一」を高等学校に冠した理由として、これから附設していく高等学校を順次増やしていく前提であったものと推察できる。この点について著者（谷本）は、1960年4月に策定された「学校法人大東文化学園振興建設計画書」所収の振興建設の大要で、高等学校の部として、「第一高等学校」（全日制普通科）に加え、「第二高等学校」（全日制普通科）の設置も、学園構想として掲げられ、理事会の承認も経ていたものと確認している。のちの1965（昭和40）年4月には、埼玉県より設置認可された大東文化大学第二高等学校（東松山市岩殿）であったが、実際には開校されることなく、当時の入学生動向の減少傾向なども鑑みて、翌66年10月に廃止された幻の附設校であったといえる。

附設校として設置された大東文化大学第一高等学校の目的は、明記された「学則」によれば、「東洋固有の道徳を基盤とし、西洋文明の粋を採つて其の短を補い、真に普遍妥当なる道徳を確立し、中学校教育の基礎の上に、信愛の情を以て血と魂の通った高等普通教育を施し、心身の健全なる発達を図り、礼節を重んじ、互に敬愛する人格を養い、真理と正義を愛し進んで勤

労に服し、責任感の強い自主的精神に充ちた中心なる国民を育成し、以て文化の進展と平和国家並びに社会の形成に貢献せんとする」、戦後日本の平和国家としての形成や文化社会の進展に寄与し得るというものであった。崇高な学校の理念のもと、開校時から尽力していた坂本通（第3代高等学校長）によれば、一高生らには「一にも努力、二にも努力、三にも努力、この努力の習慣性を身につけること」が重要であると強調したのだという。

現在の第一高等学校は男女共学制の高等学校（1995年度以降）となっているが、開校時には男子校として始まっている。しかしながら、設置認可の段階では、男女共学をあくまで前提としていたのであった。設置認可申請時の「教育課程」表などをみると、男子は3年間で95単位を、女子は家庭科（家庭一般・食物・被服）などを含む93単位を取得するとされていたのである。しかし、生徒の受け入れ体制の問題も鑑みて1961年9月の開校準備委員会などにおいて、「当分男子一本でいく」と決定し、男子校として開校したのであった（『大東文化大学第一高等学校創立六十周年記念誌』2022年）。

坂本の回顧談によれば、開校当初は校舎も大学と高校との寄り合い世帯で、高校として利用するには不都合な点も多かったという。校庭も使用不可能な状態でもあった。一高生徒らの献身的な手も借りながら、少しずつ校庭・校舎も整備をはかっていった。一高の歩みをふりかえって、至らぬ不備があっても関係者らが丸となって尽力支援し、第一高等学校の運営に対して不思議と不平不満や苦情は挙がらなかったと強調されている（坂本通「創立二十周年の歩みを省みて」『大東文化大学第一高等学校創立二十周年記念誌』1982年）。

坂本校長は、1967（昭和42）年3月の理事会・評議員会（合同）にて、「高校生徒募集に関する反省と対策」を提出し報告している。坂本によれば、「開校五年目も過ぎ、六年目の四十二年になると、高校進学生徒の漸減期に遭遇、募集方策上のいわゆる歩止りとの関連もあって、新入生の数も一挙一七〇名台にダウンするという危機に見舞われ」（坂本「創立二十周年の歩みを省みて」）、予定された生徒募集の芳しくない事態に直面し、「創立以来の高校ブームに乗った安易なムードを一擲して、生徒激減というきびしい現実に対処するため、教職員一同が誓いを新らたにして、裸になって立上るということであります。すなわち新設校や交通不便というハンデキャップをカバーするに足る内容と評判の学校にしなければならない」（「高

大東文化大学第一高等学校學則		
第一章 總 則		
(目 的)	第一 条	本校は教育基本法及び学校教育法の精神に基くは勿論であるが、東洋固有の道徳を基盤とし、西洋文明の特を採つて其の短を補い、真に普遍妥当なる道徳を確立し、中等学校教育の基礎の上に、信愛の情を以て血と魂の通つた高等普通教育を施し、心身の健全なる発達を図り、礼節を重んじ、互に敬愛する人格を養い、真理と正義を愛し進んで勤労に服し、責任感の強い自主的精神に充ちた中心なる国民を育成し、以て文化の進展と平和国家並びに社会の形成に貢献せんとすることを目的とする。
(名 称)	第二 条	本校は大東文化大学第一高等学校という。
(位 置)	第三 条	本校は東京都板橋区志村西台町一九〇二番地に置く。

校生徒募集に関する反省と対策」〕と強調した。すなわち開校当初から、一高は生徒の中間層を対象として受け入れる地域の私立学校としてつとめてきたが、生徒募集の変動にともない、これからは大学進学を希望しない（高校卒業後、就職するまたは専門学校に進む）生徒らもできるだけ収容していく方針に軌道修正すると公表したのであった。坂本校長の言にあるように、生徒募集の改善をはじめとした一高教職員らの団結や努力もあって、「その翌年の四十三年と、翌々年の四十四年には定員

の二五〇名前後の新入生を迎えることが出来て、将来への希望の光を見出し得た」（「創立二十周年の歩みを省みて」〕としていいる。このように、順風満帆な学校史というものはないのであって、あまり知られていない先人や関係者らの足跡に想いをはせると、少子化の令和時代を生きる学園関係者のひとりとして、先人らに恥ずかしくないよう、いっそうの学園・附設校全体の発展や充実にも、少なからずつとめていきたいと自覚する次第である。

大東アーカイブス活動記録

2025年10月～2026年3月

『大東文化大学史研究紀要』 第11号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』第11号に掲載する原稿を募集します。投稿締切りは2026年12月中旬を予定しております。投稿を希望される方は、2026年10月末日までにこちらのメールアドレスへお知らせください。ご質問等も随時受け付けております。

エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：
archives@ic.daito.ac.jp
「投稿規程」詳細については、百年史編集サイト「継往開来」(<https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/>)でも公開しておりますので、ご確認くださいませようお願い申し上げます。積極的なご投稿をお待ちしております。



Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究結果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発行（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発行）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。

10.7	企画展（第28回）打ち合わせ
10.9	全国大学史資料協議会全国研究会（於：大阪大学）
10.10	WG会議
10.16	企画展入替業者打ち合わせ
10.21	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
10.23	企画展入替
10.29	米朝事務所共同企画・桂米團治落語講演会 第28回企画展「戦後80年 戦時下に学んだ大東生・桂米朝」公開
11.10	WG会議（下巻初校読み合わせ）
11.17	『大東文化大学百年史 下巻』定例会・口絵撮影
12.2	WG会議
12.11	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
12.17	全国大学史資料協議会東日本部会研究会（於：お茶の水女子大学）
12.18	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
12.24	『大東文化大学百年史 下巻』定例会 紀要編集委員会
1.22	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
1.29	全国大学史資料協議会東日本部会研究会（於：國學院大学）
2.3	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
2.24	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
2.27	『大東文化大学百年史 下巻』定例会
3.4	資料デジタル化にかかわる業務
3.11	桂米朝関係借用資料返却・資料調査（兵庫県尼崎市・姫路市）
3.12	全国大学史資料協議会東日本部会研究会（於：神奈川大学）
3.16	百年史編集委員会（第二回） 歴史資料館運営委員会（第二回）
3.19	企画展（第29回）打ち合わせ
3.31	『大東文化大学百年史 下巻』上梓 『大東文化大学史研究紀要』第10号発行

資料寄贈ご協力をお願い

大東アーカイブスでは、本学関係資料のご寄贈をお願いしております。
学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（渉外連携室内）までご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。
●大東文化歴史資料館事務室（渉外連携室）
電話:03-5399-7403／E-mail:archives@ic.daito.ac.jp

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.40

発行:2026年7月31日
編集発行:大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階
TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647
E-mail : archives@ic.daito.ac.jp:
URL : <https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>